様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３０１１６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2012～2014
課題番号：２４６１７０１２

研究課題名（和文）『北の国から』と富良野――メディアコンテンツと地域文化・社会のエスノグラフィー

研究課題名（英文）Study of a changing community and media contents

研究代表者
大月　隆寛（OTSUKI, takahiro）

札幌国際大学・人文学部・教授

研究者番号：４０１８５３２７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円

研究成果の概要（和文）：メディアコンテンツと「地域」の関係について、従来の人文社会系諸領域からのアプローチを方法的に概括し、激変しつつある現在の情報環境において有効な新たな視角を学際的・領域横断的に模索する考察を行った。文化資源としてのメディアコンテンツの視点から、富良野市および近郊にある「文化資源（文化財資産）」の調査を行い、富良野が持つ文化資源の掘り起こしと、それが町の活性化－町おこしにどう利用されているのかを歴史的に捉え現在の問題点の抽出を試みた。官民連携についての住民の意識についての調査も行い、『北の国から』がどのように記憶されているのか、当時実際に関わった人たちなどへの聞き書き取材もできる限り行った。

研究成果の概要（英文）：About the relations of a community and media contents, we summarized a conventional study method and challenged for the interdisciplinary new visual angle.We analyzed problems at the present including a historic viewpoint. We investigated the cultural assets which existed in Furano and the neighboring, and how they were used for the development of the town.We performed the interview to the people concerned at that time as much as possible, for a question of how the contents and the story were memorized in the community.We experienced that memory of the community was influenced by contents irresistibly in complicated environment of the media in the current Japanese society. Community and the relations of the history and the culture continue changing in such context.We were able to describe that tradition and community identity continued always changing in similar context again through the experience of this study.

研究分野：民俗学・民衆文化論

キーワード：観光　地域研究　北海道　民俗学　メディアコンテンツ　大衆文化　メディア文化　地域振興

１．研究開始当初の背景

北海道にあり、かつ観光学部を擁する小規模な私立大学として「ホッカイドウ学」を標榜してのいわゆる地域研究、それも大学からの一方的な研究事業ではない、地元の一般の人々の理解と協業によって、開かれた新たな「地域」認識を醸成し共有してゆくことを試みてきた経緯から、単にひとつの地域だけでなく「北海道」のイメージ自体を大きく変えてゆくことになったと思われるかつてのテレビドラマ『北の国から』が「地域」認識、「地元」意識にどのような影響を与えてきたか、という問いを、ともすれば内向しがちな学内教員研究者主体のプロジェクトとして立ち上げ、それまでの地域協業の試みをさらに新たな足場において発展させることを意図した。同時に、異なる分野の視点をあるモティーフを介して包括し統合してゆくような人文学系の共同研究本来の闊達さを、そのような環境で可能にしてゆく軌道を準備する意図もあった。

２．研究の目的

テレビドラマとして始まったメディアコンテンツ『北の国から』（連続ドラマとその後のスペシャル番組含めて 1981 年から 2002 年放映）とその舞台となった北海道富良野地域との関係について、「地域」の変貌を記述する民俗／族誌（エスノグラフィー）的な研究を試みるものである。

広義の地域社会が、そこを舞台としたメディアコンテンツを媒介にしてどのように変貌していったのか、特に地元でその状況を生きた住民たちがそのような状況をどのように経験し、記憶しているのか、という点に合焦し、彼らの意識や感覚、それまで維持してきた生活のあり方などにどのように影響していったのか、それらは現在どのように解釈され意味づけられて〈いま・ここ〉の「地域」というまとまりの一部になっているのか。高度経済成長期の「豊かさ」とそれ以降の経緯、いわゆる「失われた 20 年」と言われる時代の変化の中での、「地域」社会のありようを考える枠組みを模索する試みでもある。

３．研究の方法

『北の国から』がもたらした影響について、一方ではメディアコンテンツとしての側面からの分析と考察をしつつ、同時に、メディアコンテンツとそれに伴うさまざまな動きが地元の富良野にどのような影響を与えたのかを複線的かつ相互連関的に考察、分析を加えることを企図した。特に、そこに実際に住む住民の意識や感覚にどのような痕跡を与えていったのかに注目し、『北の国から』にまつわる現象の地元の経験と記憶という視点からこれまでとは違う「地域」のあり方を提示し、それぞれの専門分野に根ざした視点から「地域」の変貌、変化について考察することを試みた。具体的な方法はそれぞれの専門やこれまでのキャリアに応じて多様だったが、基本的に素朴な聞き書きをもとにしたオープンエンデッドなインタビューの意義を尊重するという態度はチームとして共通させたので、質問票等の方法を介した場合でもその扱い方などは硬直したものに終わらなかったと自負している。

４．研究成果

全体として、それぞれの専門からの視点を活かしながら地元にアクセスしてゆくことで、いわゆる地方史や人文地理学以下、これまでの地誌的地域理解からの富良野像を相対化しつつ、〈いま・ここ〉の現在としてあり続けてきたメディアコンテンツを介した眼前の現象や事象をそれらと同じ視野に収めることで得られる新たな「地域」イメージは、ひとまず一定の輪郭を獲得できた。また、倉本聰とその作品である『北の国から』が地元や北海道に限らず、当時の全国的な情報環境やそれらを介した同時代性との相関で、それまでの地域理解の枠組みを良くも悪くも越えたところでのレイヤー的に網をかぶせられることになったことの意味や、大衆文化状況での全国的な均質性の浸透などのすさまじさなどについても、地元の個別具体の証言やそこに含まれる挿話を介して認識することができた。

武井は、文学研究という観点から『北の国から』が富良野住民の意識をどのように変えたのか、倉本聰自身の意識はどう変化したのかを概括的に確認し、またそれに伴い倉本聰自身の意識はどう変化したのかを、ひとまず作品テキストに限って確認した。

飯田は、上富良野町の地域活性化アドバイザーとして、①官民協働についての住民意識調査、②自治会活性化のためのワークショップ運営、③ヒルクライム大会の立ち上げと運営ボランティアの指導、④町民向けのまちづくり講演会での講演、⑤十勝岳総合防災訓練の視察、⑥札幌発のボランティア除雪ツアーの運営、⑦道内初のスポーツコミッションの立ち上げ、をそれぞれ行った。地域リーダーと活動を共にし、その経験や見聞をもとに地元に生きる人々の「地域」意識や生活感覚などについて包括的な考察を行った。

横田は、「富良野の地域社会・文化と町おこし」について地域で誕生した「まつり・イベント」をとりあげ、へそまつりや新たな観光コンテンツになっていった「ラベンダー」などを糸口に、それぞれのまつり・イベントにおける地域住民の認識と解釈の変遷およびそれら相互の関係性を考察した。①へそまつり②「ラベンダー」については、富良野市、上富良野町の自治体担当者へのヒア

リングおよび文献調査、③倉本聰が創設したニングルテラスについては、富良野プリンスホテル経営陣、およびニングルテラス店舗経営層へのヒアリング、また、周辺構成員として富良野演劇工場長など関連する構成員へのヒアリングをおこないイメージ形成の過程を重視した聞き取りをもとに考察を展開した。

吉岡は、メディア・アーカイブズの視点から、このメディアコンテンツ『北の国から』と脚本家・倉本聰に関連した活字や映像も含めた各種メディア関連資料の整理を試み、研究全体の基礎データとしてまとめ、チーム全体の基礎資料として共有することを行った。

岡田は、富良野の広報媒体における「北の国から」の扱い、および富良野市民アンケート内容の自由意見に含まれる「北の国から」に関する言及度合いを分析し、放送当時から現在に至るまでの富良野市民にとっての「北の国から」について位置づけについて考察を行った。富良野観光協会の職員を対象にインタビュー調査を行い、最後の放送から 10 年経過した現在の富良野市民および富良野観光にとっての「北の国から」の意義について、分析を行った。

赤川は、倉本聰が主催して地元に創設した演劇集団「富良野塾」に比較的初期から参加し、その後も活動を共にしてきた人たち複数を抽出し、当時の富良野の地元との関係や『北の国から』が人気を博していった過程での内外の反応、それによって塾内の関係がどのように変わっていったのか、などを焦点に聞き書き取材を行った。同時に、北海道における演劇活動の歴史の概況の把握、高校演劇に代表される学校を介した活動の系譜や、地域の演劇活動の転変などについても、「富良野塾」というそれまでの地元の集団とは出自も背景も良くも悪くも異なる集団がどのように見られていたのかについてチーム全体が共有し理解できる概括を行った。

坂梨は、富良野市にある歴史的建造物、資料館所属品、指定文化財などの地域にとって文化的魅力が高い資源＝「文化資源（文化財資産）」の調査を主として行い、富良野市が所有する文化資源の掘り起こしをおこない、それが町の活性化にどう利用されているのかを明らかにすることを試みた。その上で異質な文化（文化資源）として、富良野市のもう一つのイメージとなっている「北の国から」と対比・検討することでその問題点を抽出した。

大月は、菊地や外部の助言者の助けを借りながら、それぞれの分担者の作業を進めてゆく上で必要な理論的方法論的な背景、特に「地域」イメージをこれまでの人文・社会科学的な文脈でのそれと少し異なるところで設定するための前提の考察を行い、同時に、現地に足を運んで地元の人たちの生活感覚や意識について民俗学的な聞き書き・取材を繰り返してチーム全体のモティーフの輪郭を整えることを行った。富良野は単なる地理的行政的な単位でなく、情報環境との相関で合焦結像する同時代的な現象であり、その限りにおいて『北の国から』のようなメディアコンテンツと地続きに把握し考察され得る対象である、という認識は、チームで共有できるまでの内実を獲得した。

また、吉岡らの作業による基礎資料をもとに倉本聰とその仕事の全体像を把握しながら、それらがどのように評価され語られてきたのか、また同時代のその他の隣接すると思われるメディアコンテンツとその制作者たち、山田洋次や山田太一らとの比較考察作業などを、大衆文化における民俗学的な視点や方法論の適用というそれまでの自身の仕事の脈絡と連接させながら行い、倉本聰という作者自身も含めた同時代的現象の民俗学的視点からの考察など、今後の展開にも大きな示唆を得ることができた。

さらに、富良野に限らず包括的な視点から「北海道」自体がどのように語られ、認識されてきたのか、殊に広義の「観光」という視点からのメディアコンテンツを介したそれら「表象された北海道」の考察も補助線的に行い、それぞれの作業の総括的な位置づけを試みた。これらで獲得された視点や課題、アイディアなどはチーム全体の成果として、それぞれの今後の研究などに反映されてゆくだけの手応えを感じた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①<u>大月隆寛</u>「「聞き書き」はなぜ難しいものになってしまったのか」『札幌国際大学紀要』46、2015 年

②<u>大月隆寛</u>「生活・暮らし・日常――開かれた民俗学へ向けての理論的考察③」『札幌国際大学紀要』45、2014 年

③<u>武井昭也</u>「『北の国から』という表象――文学的立場から」『札幌国際大学紀要』44、2013 年

〔学会発表〕（計３件）

①<u>横田久貴</u>「『北の国から』と富良野――地域のまつり・イベントを媒介に」北海道都市地域学会　2015年8月(予定)　札幌学院大学サテライトキャンパス

②飯田俊郎「福祉除雪における広域ないし短期ボランティアの必要性と可能性――地域内・長期の視点から」第 30 回寒地技術シンポジウム(土木学会認定ＣＰＤプログラム)2014 年 12 月 3 日　札幌コンベンションセンター

③大月隆寛「「聞き書き」はなぜ難しいものになってしまったのか」「科学研究費・基盤研究（Ｂ）：「日本近代演劇デジタル・オーラル・ヒストリー・アーカイヴ」2014 年度研究会」2014 年 9 月 19 日　明治大学駿河台キャンパス

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
大月　隆寛　(OOTSUKI, Takahiro)
札幌国際大学・人文学部・教授
研究者番号：　４０１８５３２７

(2)研究分担者
岡田　顕宏　(OKADA, Akihiro)
札幌国際大学・人文学部・准教授
研究者番号：　２０３３７０８３

坂梨　夏代　(SAKANASHI, Natsuyo)
札幌国際大学・人文学部・講師
研究者番号：　４０４４８８３２

武井　昭也　(TAKEI, Akiya)
札幌国際大学・人文学部・教授
研究者番号：　５０２８９６８３

横田　久貴　(YOKOTA, Hisataka)
札幌国際大学・人文学部・准教授
研究者番号：　５０５３５１２７

飯田　俊郎　(IIDA, Toshirou)
札幌国際大学・スポーツ人間学部・教授
研究者番号：　６０２５４７３６

菊地　暁　(KIKUCHI, Akira)
京都大学・人文科学研究所・助教
研究者番号：　８０３１４２７７

赤川　智保　(AKAGAWA, Chiho)
札幌国際大学短期大学部・幼児教育保育学科・准教授
研究者番号：　８０４３８４０７

吉岡　精一　(YOSHIOKA, Seiichi)
札幌国際大学・人文学部・講師
研究者番号：　９０４３８４０８